



Title	教師の成長におけるピリーフの変化 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山田, 智久
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第11614号
Issue Date	2014-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/58132
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Tomohisa_Yamada_abstract.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：山 田 智 久

学位論文題名

教師の成長におけるビリーフの変化

本研究は、日本語教師が持つ教師の役割観ビリーフを分類し、そのビリーフを測定する質問紙を開発し、彼らの成長過程におけるその変化を実証的に検証することを目的としている。本論文は、6章からなり、参考文献と4点の付録がつけられている。以下、各章の内容を記述する。

第1章では、本論文の序論として、研究背景と目的を説明している。教師教育における研修モデルでは、詰め込み的な見習い型・トレーニング型モデルから、教師の自律的成長を促す自己研修型モデルへのシフトが見られると著者は主張する。教師がとる指導上の行動はその教師が持つビリーフに左右されるとしている。ビリーフは変化するものであり、その変化を可視化することで教師の成長過程を考察し、自己研修型モデルの教師教育に貢献することが本研究の最終的な目的であると著者は述べている。

第2章では、先行研究のレビューを通して、本研究の研究課題が必要となるに至った背景を述べている。著者はまず、教師の発達過程においては、授業実施に必要な基本的な型の理解と習得、つまり共通化への方向性から、それが暗黙知化すると同時にしだいにその型から脱却して学習者や教育環境にあわせながら各自の特徴が発現する個性化の方向性に転換が見られると指摘する。そして、自己研修型モデルの教師教育においては、教師自身がこの発達過程のどの位置にいるかを把握する必要があると主張する。現在、この目的で授業記録やチェックリストあるいは授業録画を見て自分の行動を振り返るリフレクション活動が行われているが、その際に用いられるリフレクションを促す参照枠に関する研究が比較的遅れた状況にあるという。教師ビリーフの変化を可視化してどの地点に自分がいるかを把握できれば、本研究が自己研修型教師養成モデルに貢献できると主張する。しかし、これまでの教師ビリーフの研究は、第二言語習得研究の学習者ビリーフ研究の影響を受けて発展してきた経緯があり、教師ビリーフを考察する上で定義や要因概念の妥当性に課題があった。教師ビリーフを概念化するうえで、教師の役割観を視点にすえることを著者は着想する。また、教師ビリーフの先行研究においては、質問紙を用いたビリーフの構成要因の分析に偏りがちで、時間的な変化の考察はこれからの課題であ

った。以上の先行研究のまとめにもとづき、研究課題を（１）教師の役割について再考する、（２）教師の役割観ビリーフを測定する質問紙を開発する、（３）教師のビリーフの変化について検証するとして、それぞれを研究１，２，３に割り当てた。

第３章では、研究１として日本語教師の役割観に関する調査報告を行っている。日本国内の高等教育機関で教える日本語教師３０人を対象に自由記述回答方式の調査を実施し、データを定性データ分析ソフトNVivoによりコード化しカテゴリー分けした。結果は、「学習者の学習環境を整備する」、「学習者を心理的に支援する」、「学習者の動機づけを高める」、「教室運営をする」、「学習者の自律を促す」、「個々の学習者を見極める」、「教える」、「学習を促す」、「学習項目の効果的な提示」、「フィードバックを与える」、「教室内での具体的な言語使用場面を創り出す」、「異文化理解を助ける」の１２項目に分類された。さらに、これらを視点の方向性から「教師の技術」と「学習者の変容」に分類した。また、教歴が短い教師ほど、自分の教え方や教材などの対象を志向するのに対して、教歴が長い教師ほど学習者に視点が向かう傾向があったと報告している。

第４章では、研究２として教師の役割観ビリーフの因子構造を調査している。研究１の結果および先行研究の知見より教師の役割観ビリーフを測定する質問紙を作成し、日本国内の高等教育機関で日本語を教える１５８人の教師を対象に調査を実施した。探索的因子分析の結果３因子が抽出され、「学習者主体の活動志向」、「教師主体の活動志向」、「教授方法主体の活動志向」とそれぞれ命名した。教歴や年齢の違いによる変化を調べるために分散分析を行い、教歴では「学習者主体の活動志向」と「教師主体の活動志向」において、年齢では「教師主体の活動志向」において有意差が認められた。具体的には、初任教师では学習者主体・教師主体両方の活動志向が見られたが、中堅教師では教師主体、ベテラン教師では学習者主体の活動志向が見られた。また、年齢が上の教師ほど教師主体の活動志向が見られた。教歴を積むことで教師の視点が変化することを示唆するとともに、年齢による影響もあることを示しており、教師の外国語学習経験の影響を著者は推測している。

第５章では、研究３として教師ビリーフの変化についての調査報告を行っている。研究２において教歴の違いによる視点の変化が見られたことを踏まえて、２人の日本語教師を対象に３年の間隔をおいてビリーフの時間的変化の有無を考察した。データの収集・分析にはPAC (Personal Attitude Construct) 分析の手法を用いた。調査対象者が連想刺激文から思いつく語を書いて重要度順に並べ、直感的な近接度を７段階で評価する。こうして得られた非類似度行列をクラスター分析にかけて dendrogram を作成し、対象者自身と話し合いながらクラスターに分ける。このクラスターにもとづいて、対象者に対して半構造化インタビューを実施する。連想刺激文の決定にはパイロット調査を４回行ない、回答をもっとも多く得ることができかつ個別の教師ビリーフが抽出できた刺激文を選択した。第１回調査では、教師Ａのビリーフ構造では性質が類似したビリーフが多数含まれているのに対して、教師Ｂでは性質の異なるビリーフが含まれていた。第２回調査では、教師Ａのビリーフ構造には顕著な変化が見られなかったが教師Ｂでは大きく変化していた。

第6章では、本研究の総合考察として、著者は以下の主張を展開している。日本語教師の役割観は教師の行動の視点と学習者の変容の視点に大別され、初任時に両方の視点への関心が見られるが、教歴を積むことによって中堅教師では教師側の視点に移行し、さらにベテラン教師になると学習者側の視点への関心が強まる。教師ビリーフは、コアとなる強いビリーフと周辺部にある弱いビリーフから構築されており、この変化のようすを考察すると、同質のビリーフは連結しあってさらに強いコアビリーフを形成し、周辺部にある相対的に弱いビリーフは知識や経験を得ることで変化、消滅していく。また、本研究の教育的示唆として、教師ビリーフの変容を教師の成長としてとらえるときに、自身のビリーフ構造の把握がその変化を受容するうえで重要であり、本研究の成果は自己研修型教師教育のリフレクション活動に利用が可能であると著者はしている。しかし、本研究における質問紙を用いた横断的調査、PAC分析を用いた縦断的調査はともに、調査の規模と対象者の属性に限界があるので、結果の解釈に注意を要する。得られた知見の一般化へ向けて応用言語学の教師教育分野でさらに研究が継続されていくことを著者は要望している。